

走れ、もう一つの部屋へ

西日が差す頃

窓が明るくなつて

ベランダの鳩たちのシルエットが

優しく重なり始める

昼間の世界から

追い立てられるように

ビルの狭間を

足早にすり抜け

黄色のビル

灰色のビル

白いビルを

横つ飛びに

暗号めいた動作と呪文を繰り返しながら  
まっしぐらに

エレベーターの直角逃亡

白い小さな空間が

密やかにそこに在り

収縮を始めたこの肉体を吸い込む

洗濯物が声を潜めて

こじんまりと畏まったAV機器がコミックに欠伸をし  
野草のような自然さで、鉢植えたちが挨拶を送り  
組み立てを待つカンバスの枠木が物欲しげに視線を  
投げる

白い部屋の仲間たちが

四角い空間を

温かくデフォルメしてくれる

生きることの不可解さが

六二年かけて鑄造してきた

この魂を

優しく迎えてくれる

生身でありながら、イメージの世界の

不可解な微笑から生まれたモナリザ

この空間の艶めかしき所有者

恐らくは、影しか見せぬあの鳩も

追悼を得意とする西日の弱い日差しも

今にも自らを組み立てようと動きだしそうな

あのカンバスの梓木たちも

全部あの微笑の演出なのだろう

六二歳の歪みきつた魂は

今、最上階に登って、天空に近づいている